
背負い

佳生

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

背負い

【Nコード】

N5107A

【作者名】

佳生

【あらすじ】

人の為に命を失った青年と、少年の身体を借りて葬式に現れた謎の存在。不幸と自己犠牲。これは名もない青年と少年の物語。

（前書き）

輪郭がありません。説明よりも会話重視の小説となりました。

ああ、やっと見つけてくれたんだ。

ありがとう、かな？

……ごめん、の方だよね。

嫌だなあ。

せつかく家に帰ってこれたのに、そんなに泣くものじゃないよ。

僕は末っ子じゃないか。

母さんも父さんも、姉さんも、そんなに泣くなよ。

本当にもう、しょうがないな……。

「命が無くなるのは、それだけ人を不幸にするということだよ、お兄さん」

そうだね。

そうだ。

「望まれて生まれてきたから、なおさらね」

うん。

ところで、君は誰？

お葬式にでも来たの？

「そうだよ。お兄さんのお葬式を見に来ただけど……付け入る

隙もない」

付け入る隙？

「このごろ、多いんだよね。世界での勤めを終えた人間に対して、敬意をはらわない葬式って。もし、ここもそんなだったら、お兄さんの躰、貰っていいこうと思ってるさ」

……僕の躰って、そんなにいいの？
だって、お腹に穴が開いてるよ？

「何言ってるのさ！ とっても綺麗だよ。お兄さんはいい人だったみたいだからねえ」

そんなことないさ。

相手の嫌がることはしないようにしてただけで……でも、結局、殺されちゃった訳だけど。

「殺されたのは、お兄さんがいい人過ぎたからだよ。躰が保たなくなるくらい」

持ち上げられたモンだなあ………恥ずかしい。

「そうだな、向こうの世界に行ったら神格ももらえるよ。神様」

か………っ！？

「当たり前じゃない。人に尽くしたんだから」

あ、いや、それは困る！

いろいろ、本当に困るよ！僕は別に………！

「謙虚だよね、お兄さんはさあ」

そ、うかな？

「うん。………と、お坊さんが来ちゃった。また後でね、お兄さん」

え、うん。

そう言った男の子は、喪服の中に溶け込んでゆく。

名前がわからないけれど、どうやら親戚の子みたいだ。

………にしては、ずいぶんと大人びたこだったなあ。

お坊さんの声が心に響く。心地いい感じだ。

嫌いじゃない。

しくしく、て声が大きくなってきた。

不幸、か。

うん。

不幸かもね。

母さんも父さんも姉さんも優しいから、きっと僕のこと忘れらんないだろうな。

覚えててくれるのは嬉しいけど、その分だけ泣かれるのは困る。

それだったら、覚えてくれてなくていい。

嫌じゃない？

自分のせいで人が泣くのつて。
僕は嫌なんだよね。

たまたま出会って、助けてあげたはずの彼女達が、また泣いてるんだよ。

しかもごめんなさいとか言ってるし。

あなた達のせいじゃないよ、って母さんが泣きながら言ってる。

いまいち、説得力が無い。

泣くなよなあ。

「お兄さんって、死んでからも気苦労が絶えないんだねえ」

うゝん？

そうみたい。

「えっと、あそこのお姉さん達が、お兄さんに助けられた人？」

うん。

また泣かせちゃった………まいったなあ。

「ふう〜ん。わかった!」

え？

「ねえ、お姉さん達」

何をするつもりなんだろう。

少年がいきなりこちらを指差した。

「あそこのお兄さんが、泣いたらダメってゆってるよ？」

バツ！！

……………！？

いや、見すぎだろ、皆して。

まさにその場にいる全員がこっち見てるよ。

は……………ずかしいんですけど。

「泣かれる為に、お兄さんはここにいる訳じゃないよ」

そうだね。

……………でも、その言葉は、より一層の涙を誘ってるよ。
ダメじゃん。

それから程なくして、そこは宴会の場になった。

ふだんはあまり飲まない父さんも、今日はがぶ飲みで、皆とワイワイやってる。母さんも姉さんも、いつもよりは、アルコールに手を付けていた。

明日は二日酔いだね。

「そうじゃないかもよ？ 普段飲まなくても、飲める人だったりす

るんだよねえ」

そうなんだ。

「ねえ、お兄さん」

なに？

「お兄さんはさあ、どうして死んだの？ 本当はこんなところで死
んじゃうのは、おかしいと思うんだけど」

どうして………て言われてもなあ。
刺さっただけだし。

「うーん」

まさか、あんでだけで死ぬなんて思わなかったよ。
女の子にあんな思いさせなくてよかった。

「やっぱり、お兄さんってそういう人なんだね」

馬鹿みたいだね。

「そんなことはないと思うけど」

そう言ってくれと、嬉しいな。

「どういたしまして」

ぼんやりとした会話のなかで、僕はあることを思った。

君ってさ、正体なんなの？

「し……正体？」

うん。

君って凄そうだからさ。

「凄いつて？」

僕と話せたり、そんな子供の格好してるところか。

「これは借りてるだけだよ。後でちゃんと返すっていう約束で借りたの！」

へえ……そんなこともできるんだ。

だったら、僕に、全部背負わせることってできる？

「背負うつて？」

僕が、皆に与えた不幸をさ。

背負えたら、いいなつて。皆幸せでしょう。

「できる……けど、そんなことしたら、誰もお兄さんのこと思ひ出さなくなっちゃうよ？ それに、僕に何か差し出さなきゃ」

差し出すの？

何でもいいよ。

僕は、誰かが不幸になるのが一番嫌なんだ。

たとえば、地獄に落とされようが、それよりも不幸が恐い。

「そう……人の不幸を背負うということは、善くも悪くも、その人から感情を奪うことだよ？ 捧げるものは決してやすくはない。そう、お兄さん自身とかかな」

僕自身？

「そう。お兄さん自身。 躰も魂も。存在自体を差し出すってこと」

僕……自身か。

うん、いいよ。

「……………」

君は、嫌なのかな？

「嫌じゃないけど……お兄さんみたいなご馳走は、滅多にないからね。でも……………」

……………？

「ちょっともつたいたないかなって」

もつたいたない？

「人間にしておくにはね」

そうなんだ？

「うん。でも、いいよ。お兄さんはいい人だから、黙って言うこと聞くよ」

うん。

ありがとね。

「どういたしまして」

永遠の眠りっていうけど、僕は、本当に今後目を覚ますことはないだろう。

だって自分が重く沈んで消えてゆくのがわかる。

背負いこんで背負いこんで霧散しているのがわかる。一回死んでる身としては、あまり恐いとは思わなかった。

ただ消えていく自分が、目の前にいるというだけで。特に、不満もないさ。

皆から、僕の与えた不幸を奪い返したただけだから。

さよなら、お幸せに皆。

もう、会うことはないだろうけどね。

あのお兄さんは、疲れていたんだろうと思う。

不幸を恐れる自分に。

幸せそうな周囲に。

不幸をあたえてはいけない幸福を奪ってはいけない。

その脅迫観念が、きつと、お兄さんをあんなに綺麗に純粋に育て上げてしまったんだろう。

美味しかったけど、複雑だ。

こんなに美味しい人は、後数百年しても生まれないだろう。

それだけ、純粋だった。

磨きぬかれた鏡のように、綺麗だった。

「純粋で、綺麗なモノほど、生きにくい世界になったんだね、ここは」

ベッドの中で横になって、小さくため息を吐いた。

「この身体、返すね。おやすみ」

もぞもぞと布団に潜り込み、少年は優しく囁いた。

目を閉じて数秒後子供部屋には、小さな寝息が響きはじめた。

誰も知らない、誰にも知られない、世界一臆病で優しい青年の背負った物語は、こうして終わる。

誰かの満足なんて関係なく、最期の最後で、青年は我儘を通したのだった。

しかし、それすらも、知られることはなく、全ては平常の通りに、時間を刻む。

彼が望んだように…

（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5107a/>

背負い

2010年10月20日19時32分発行